●〈症例〉

特異な病理組織像を呈した胃の inflammatory fibroid polyp の1例

野澤宏彰¹⁾ 津久井 元 喜納五月 高倉 裕一²⁾
橋本直明 岸田由起子³⁾ 薬丸一洋 加賀美 尚¹⁾
関川敬義

¹⁾東京通信病院／第1外科, ²⁾同／消化器科, ³⁾同／病理科
〔Key Words〕 胃, inflammatory fibroid polyp

はじめに

inflammatory fibroid polyp (IFP) は、好酸球の浸潤を伴う肉芽性変化であり、比較的稀な粘膜下に主座をおく病変である。我々は、病理組織像が典型的ではないため、診断が困難であった胃 IFP の1例を経験したので報告する。

症例：53歳、女性。

既往歴、家族歴：特記すべきことはない。

現病歴：1999年10月、検診の上部消化管造影検査で胃の異常を指摘された。11月19日当院消化器科で胃内視鏡検査を施行し、胃前庭部大彎に粘膜下腫瘍を認め、12月21日外科に紹介入院となった。

入院時身体所見：眼瞼眼球結膜に貧血、黄疸なく、腹部に腫瘤、圧痛を認めない。

入院時検査所見：血算、生化学、腫瘍マーカー等に異常を認めない。

上部消化管造影：充盈像では、前庭部大彎に1 cm 大の透亮像を認め、二重造影では、同部になだらかな

立ち上がりを示す隆起性病変が認められた (Fig. 1)。

胃内視鏡検査：前庭部大彎に1 cm 大の、中央に浅い陥凹を有する山田3型の粘膜下腫瘍を認めた (Color 1)。また、胃角部前壁にも、同様の特徴を示す5 mm 大の病変と、3 mm 大の類似病変が認められた。生検では、いずれの病変にも特に悪性所見はなかった。

患者が無症状であることを考慮し、治療方針決定のため、前庭部の腫瘍に対してのみ、12月23日、内視鏡的切除術 (EMR) を行った。

病理組織学的所見：粘膜筋板を挟んで、粘膜深部および粘膜下層に線維芽細胞様の紡錘形細胞の増生を認めた (Fig. 2)。これが同心円状に配列し (Fig. 3)、周囲には軽度の好酸球浸潤を伴っていた。増生している紡錘形細胞は免疫組織化学的には、CD34と vimentin が陽性で (Color 2)、NSE 軽度陽性、S-100蛋白陰性、neurofilament 陰性であった。

EMR から6ヶ月経過した2000年5月19日、再度胃内視鏡検査を行った。EMR 部はS₂ stageの潰瘍瘢痕となっていたが、切除を行わなかった胃角部前壁の2病変はともに消退していた。

考 察

胃の IFP は、1949年に Vanek¹⁾ が6例を報告し、その後 Helwig and Ranier²⁾ が臨床病理学的所見から IFP の名称を提唱した、比較的まれな隆起性病変で、大きいものでは粘膜下腫瘍様形態を示す。特徴的な病理組織像として、粘膜固有層の深部および粘膜下層に、線維芽細胞様の紡錘形細胞が loose な束をなして増生し、これが小血管周囲に同心円状に配列する onion skin pattern が挙げられている²⁻⁴⁾。しかし本症例で

Fig. 1 Barium fluorography demonstrated a filling defect in the greater curvature of the gastric antrum (left; indicated by an arrow). With double-contrast technique, intramural extramucosal contour was revealed (right; indicated by an arrow).

Fig. 2 Histological appearance of the resected specimen (hematoxylin and eosin (H. E.) staining; original magnification, ×40).

は、同心円状の増生は見られたものの、中央には小血管が見られず、非典型的であった。また、好酸球等の非特異的炎症性細胞浸潤も特徴として挙げられているが²⁻⁴⁾、本症例ではそれも軽度であった。粘膜内および粘膜下層に病変がみられること、増生する細胞がCD34陽性、vimentin陽性⁵⁾で間葉系由来と考えられることなどから、総合的にIFPが考えられた。

本症例では、切除しなかったIFPに類似した病変が、6ヶ月後の観察で、完全に消失していた。文献的には、形態の変化を示したIFPの報告は散見されるが、いずれもIFPの発育に伴って、一部が脱落したことが原因であり^{6,7)}、消滅したという報告例はない。従って、本症例の経過は興味深く、また、IFPの成因として有力視されている炎症説^{3,4)}を支持する所見であると考えられた。

本稿をまとめるにあたり、国立がんセンター中央病院臨床検査部 下田忠和部長のご指導を賜りましたことをここに深謝いたします。

文 献

- 1) Vanek J: Gastric submucosal granuloma with eosinophilic infiltration, *Am. J. Pathol.*, 25: 397-411, 1949.
- 2) Helwig EB, Ranier A: Inflammatory fibroid polyp of the stomach. *Surg. Gynecol. Obstet.* 96: 355-367, 1953.
- 3) 森田博義, 谷 昌尚: inflammatory fibroid polyp. *臨床消化器内科*, 6: 1341-1347, 1991.
- 4) 岸本秀雄: 胃炎症性類線維ポリープ. *消化管症候群(上巻)* 日本臨牀, 5: 345-347, 1994.
- 5) Kolodziejczyk P, Yao T, Tsuneyoshi M: Inflammatory fibroid polyp of the stomach. A special reference to an immunohisto-chemical profile of 42 cases. *Am. J. Surg. Pathol.* 17: 1159-1168, 1993.
- 6) 辻 賢二, 福田新一郎, 布施好信, 他: 特異な形態を呈し、短期間に著明な形態の変化をきたした胃の好酸球性肉芽腫

Fig. 3 Spindle-shaped cells proliferated and lined concentrically (H. E. staining; original magnification, ×250).

の1例. *Gastroenterol Endosc.* 25: 1061-1065, 1983.

- 7) 雨宮慎二, 赤松良彦, 雁木淳一, 他: 著明な形態的变化を呈した食道胃接合部の好酸球性肉芽腫の1例. *日消外会誌*, 21: 488, 1988.

A Case of Inflammatory Fibroid Polyp of the Stomach Exhibiting Unusual Histopathological Appearance

Hiroaki Nozawa ¹⁾	Hajime Tsukui
Satsuki Kina	Yuichi Takakura ²⁾
Naoaki Hashimoto	Yukiko Kishida ³⁾
Kazuhiro Yakumaru	Hisashi Kagami ¹⁾
Takayoshi Sekikawa	

A 53-year-old woman was admitted to our hospital for evaluation and treatment of the abnormality in the gastric antrum revealed by barium fluorography. Endoscopic examination showed a semi-pedunculated submucosal tumor-like lesion with slight central erosion, 1 cm in diameter, in the greater curvature of the antrum. Furthermore, two similar polyps of 5 mm and 3 mm in diameter were found in the anterior wall of the angle. All the biopsy specimen of these polyps showed benign findings (Group I). Since she was asymptomatic, only the polyp in the antrum was removed by endoscopic mucosal resection. Histopathologically, spindle-shaped cells proliferated chiefly in the submucosal space, which were positive for CD34 and vimentin. The polyp was diagnosed as inflammatory fibroid polyp (IFP) that exhibited unusual histological features; typical "onion-skin pattern" was not observed, and infiltration of eosinophils was mild. Interestingly, the other polyps remained disappeared by endoscopy 6 months later. The observation seems to support that IFP may be developed through inflammation.

¹⁾Department of Surgery, Tokyo Posts and Telecommunications Hospital. ²⁾Department of Gastroenterology, Tokyo Posts and Telecommunications Hospital. ³⁾Department of Pathology, Tokyo Posts and Telecommunications Hospital.

<カラーは4頁に掲載>